

聖書：士師記 8：1～35（22～28）

説教題：主が治められる

日時：2014年5月11日

前回ギデオンはたったの300人で13万5千人のミデヤン人を敗走させました。最初、ギデオンは3万2千人の兵士たちを用意しましたが、主は彼らが「自分の手で自分を救った」と言って誇ることがないようにと、その数をまず1万人に減らし、さらには300人にまで減らしてしまわれました。しかしイスラエルは主により頼んでミデヤンに勝利します。そして二人の首長オレブとゼエブの首を取ったところまで前回記されました。

さて、今日の章でまずエフライム人がギデオンに文句を言って来ます。1節：「そのとき、エフライム人はギデオンに言った。『あなたは、私たちに何ということをしたのですか。ミデヤン人と戦いに行ったとき、私たちに呼びかけなかったとは。』こうして彼らはギデオンを激しく責めた。」6章35節を見ると、確かに今回の戦いのためにギデオンが呼び掛けた部族のリストの中にエフライム族は含まれていませんでした。彼は自分たちの部族マナセと、他にアシェル、ゼブルン、ナフタリに使者を遣わして召集をかけました。いずれもイスラエルの北方に位置する部族です。エフライムは中央部に位置し、聖所シロを持ち、南のユダと並んでイスラエルの代表的な部族でした。マナセの最も弱い分団アビエゼル出身のギデオンとしては、エフライム人にまではとても召集をかけられなかったのでしょうか。しかし彼らは自分たち抜きで戦いが始められ、大勢が決してから参加を呼びかけられたことが面白くなくて、激しくギデオンに食ってかかったのです。

それに対してギデオンは答えます。「今、あなたがたのしたことに比べたら、私がいったい何をしたというのですか。アビエゼルのぶどうの収穫よりも、エフライムの取り残した実のほうが、良かったのではありませんか。神はあなたがたの手にミデヤン人の首長オレブとゼエブを渡されました。あなたがたに比べたら、私に何ができたのでしょうか。」ギデオンはここでエフライム人が二人の首長を仕留めたことを指して、神はあなたがたに榮譽を与えてくださった。それに比べて私のしたことなど取るに足りない、と述べます。この結果、彼らの怒りは和らぎます。箴言15章1節：「柔らかな答えは憤りを静める。しかし激しい言葉は怒りを引き起こす。」こうして彼は不必要な争いを起こすことなく、一致を保つことに成功します。

ここまではOKです。しかしこの後のギデオンをどう見るかは、人によって違って来ます。ギデオンは300人の人々とヨルダン川を東側へ渡ってミデヤン人の王ゼバフとツアルムナを追います。そしてまずガド族のスコテの人々に協力を求めますが、断られてしまいます。それに対してギデオンは仕返しをすると宣言します。7節：「そこでギデオンは言った。『そういうことなら、主が私の手にゼバフとツアルムナを渡される時、私は荒野のいばらやとげで、あなたがたを踏みつけてやる。』」また、もう少し先へ進んで、同じくガド族のペヌエルの人々に協力を求めますが、ここでも断られてしまいます。その彼らにも復讐を宣言します。9節：「それでギデオンはまたペヌエルの人々に言った。『私が無事に帰って来たら、このやぐらをたたきこわしてやる。』」そして、その後を読むと分かる通り、ギデオンはゼバフとツアルムナを打ち取り、帰って来てスコテとペヌエルの人々に復讐します。スコテの人々にしたことは16節

に、ペヌエルの人々にしたことは 17 節に記されています。果たして私たちはこの記事はどう見るべきでしょうか。学者たちの間でも意見は二つに分かれています。

まずその一つの見方は、ここでギデオンは正しく行動しているという見方です。なぜスコテとペヌエルはギデオンからの協力要請を断ったのでしょうか。彼らはヨルダン川東側の人々ですから、もしギデオンを助けて彼が負けた場合、東の国ミデヤンから真っ先に攻撃されるのは自分たちだと恐れたからでしょう。目の前のギデオンの部隊はわずか 300 人です。こんな彼らではとてもミデヤンに勝てない。そこでスコテとペヌエルは自分たちの身の安全を確保するために、ギデオンたちを見捨てた。こうして彼らは敵側に付いたのですから、敵がされるのと同じ扱いを受けても当然である、ギデオンは正しく行動した、とこちらの見方を取る学者たちは言います。18 節以降のゼバフとツアルムナの処刑の記事もそうです。これも残酷な記事に見えますが、19 節にあるように、これはゼバフとツアルムナの仕打ちに対する当然の報いである。ギデオンは最初、彼らの命を取る榮譽を息子エテルに与えようとしませんが、エテルは恐ろしくてできませんでした。そこでギデオン自身が手を下しましたが、これは正当なことであり、人間的な感情を抑えてでも、実行しなければならなかったことであるとその人々は言います。

しかし、これとは違う見方をする学者たちもいます。その人々によれば、4 節以降のギデオンは、勝利の後、正しい道から外れ始めているとします。ここでの彼の追撃は狂乱じみている、と。確かにスコテとペヌエルの態度は問題であるとする点で先の人々と一致します。しかしだからと言って、ギデオンが彼らに語った言葉は行き過ぎである。ましてその仕返しはあまりにも残酷。ギデオンは以前とは変わってしまった。この見方を支持する一つの大きな根拠は、これらの記事に主が出て来ないことです。主が彼の働きの背後にあって、彼を支え導いているというしるしやコメントがありません。これは前の 7 章とは対照的です。つまりギデオンはここではただ自分の力で、人間的な思いで振る舞っている。なぜこのような異常な熱心を示して二人の王たちを追撃したのか、その動機が 19 節に明らかにされています。ギデオンは言っています。「彼らは私の兄弟、私の母の息子たちだ。主は生きておられる。おまえたちが彼らを生かしておいてくれたなら、私はおまえたちを殺しはしないのだが。」ここにあるのはギデオンの個人的な復讐心です。主のため、あるいはイスラエルのためと言うより、個人的な関心のもとに動いている。20 節の長男エテルの登場も、以前とは変わってしまったギデオンを浮き彫りにするものと言われます。臆病で弱気なエテルは以前のギデオンそっくりです。しかし今のギデオンは力づくで、無慈悲に、残酷な復讐を実行する人になっています。これは大きな勝利を経て変わってしまった彼を描いているものなのではないでしょうか。

22 節以降の記事も、ギデオンの評価を巡って意見は二つに分かれます。ギデオンはここでイスラエル人から「あなたも、あなたのご子息も、あなたの孫も、私たちを治めてください。あなたが私たちをミデヤン人の手から救ったのですから。」と言われた時、こう答えました。23 節：「しかしギデオンは彼らに言った。『私はあなたがたを治めません。また、私の息子もあなたがたを治めません。主があなたがたを治められます。』」そしてその後、人々から金を集めてエポデを作ります。これが偶像礼拝へとつながり、ギデオンとその一族にとって落とし穴となります。ある人たちは 23 節のギデオンの言葉は立派な告白だと見ます。そしてエポデを作ったことも良い意図からなされたものであるとします。ギデオンとしては主が治められる

のだから、主の御心がいつも伺われなければならない。そのためにエポデの作成を提案したの
だろう、と。ただその良い意図で始めたことが結果的に悪へとつながった。ここにギデオンの
ミスがあったことは、こちらの立場に立つ人も認めます。彼は勝手にエポデを作ってしまった。
そしておそらく祭司のまねごとのようなことをしたのでしょう。悪意はなかったとは言え、不
注意によって主のみことばが命じる道から外れてしまった。また最後は大勢の妻を持ったこと
が 30 節に記されています。時代的な制約があったとは言え、確かにここに残念な結果につな
がったギデオンの姿があることは認めます。

一方、別の見方をする人は、23 節のギデオンの言葉は不十分なものであると言います。22
節でイスラエル人は「あなたが私たちをミデヤン人の手から救った」と言っていますが。7 章
2 節で主が「イスラエルが自分で自分を救ったと言って、わたしに向かって誇ることがないよ
うに」と言われて、これまでのことが導かれて来たことを思えば、ギデオンはここで「救った
のでは私ではない。主が救ってくださったのだ！」と言うべきであった。しかし彼はただ「主
があなたがたを治められる」と一般的な原則を述べるにとどまった、と。そして彼は言葉では
正しいことを言っているようだが、実践では違っている。確かにエポデと主の御心を伺うこと
にはつながりがあるようだが、彼はここで見える栄光を求めている。これはかつて人々から金
を集めて、金の子牛を作り、偶像礼拝へ導いたアロンの姿を彷彿とさせるものである。しか
も彼はエポデを聖所シロにではなく、自分の町オフラに置きました。つまり自分のそばに見え
る栄光を置いておきたかった。また彼は大勢の妻を持ちました。私が治めるのではないと口で
は言いながら、実際には王様のような生活をしていた。そして 31 節で自分の子どもに「アビ
メレク」と名付けました。アビメレクとは「私の父は王」という意味です。つまりギデオンは
私は王ではないと言いつつ、心の底では王になることを切望していた。そんな風にも読めます。
果たして私たちはどう見るでしょうか。

どちらの見方を取るにしても、少なくとも言えることは、ギデオンはこの 8 章の間に理想的
な状態からは落ちて行ったということです。そしてどちらかと言えば最後にちょっと誤りに落
ちたと言うより、どんどん正しくないものが混じって行ったと見る方が良いのではないでしょ
うか。元来臆病で、小心者で、ただ主に信頼して仕え始めたギデオン。しかしミデヤン人への
大勝利を経て後、このような残念な生涯の終わり方となってしまった。

私たちはここから何を学んだら良いでしょうか。最後に二つのことを短く述べたいと思いま
す。一つは私たちは決してこの記事を他人事のように読むことはできないということです。私
たちはギデオンを見て、自分にも同じような面があることを思わされるのではないでしょ
うか。ある時、必死に主に頼って一つの課題を乗り越えても、その後で正しい道から外れてしま
う。一つの勝利の経験によって、いつの間にか高ぶり、栄光は主に帰すものだと言いつつ、
実際には少しでも多く自分に栄光を帰そうと図る。自分は今、その誤りに陥っていないか。私
たちはギデオンを鏡として自分に当てはめてこそ、この箇所を本当に正しく読んだことになる
でしょう。

そしてもう一つは、このギデオンの姿は残念なものであるとは言え、このことを通して人間
には望みが持てないことを改めて教えられるということです。彼は尊い働きのために用いられ
ましたが、完全な人ではありませんでした。救いの働きをいくらかなしましたが、真に頼れる

器ではありませんでした。こうして私たちはまことのさばきつかさ、イエス・キリストへと駆り立てられるのです。1 ペテロ 2 章 6 節：「彼に信頼する者は、決して失望させられることがない。」1 ヨハネ 3 章 5 節：「キリストには何の罪もありません。」この罪を犯さず、私たちを失望させず、最後までその働きを成し遂げるまことの士師を神は私たちに与えてくださいました。その方によって、私たちは救いをいただくことができます。その方によって救われるとは、私たちがもはやどのように歩んでも問題ないということではありません。救われるとは益々主に似る者へ作り変えられて行くということであり、私たちは救い主と結ばれることによって益々本来的な歩みへと立ち返らされて行く者でなければなりません。

私たちは神が与えてくださったまことの士師を感謝しつつ、その方により頼んで正しい道を歩めるように祈りたいと思います。大きな戦いの前に主により頼むだけでなく、その後も主により頼む者であるように。素晴らしい体験をさせていただいたことで、いつしか高ぶり、自らを誇り、自らに栄光を求める者となることがないように。私たちをへりくだって主により頼む時に、300 人で 13 万 5 千人を敗走させる恵みに生きることができます。まことの士師イエス・キリストに信頼しつつ、この信仰の道を最後まで歩み続けることを主に祈り求めて、新しい週も歩みたいと思います。